不思議なすれ違い

「けど・・・この辺りからかな、おれの中で何かが狂い始めたのは。そう・・・少しずつだ。」

「おい敬っ！」

「んんっ！？えっ、何？」

「おまえ・・・おれの話聞いてたか？」

「あー、いや・・・ごめん、何だっけ？」

恵太は不機嫌を隠すことなく音にして息を吐く。「だからあ」と譜面を鉛筆で指差すその姿を見て、敬は理不尽だなと思いながらも怒りの感情を覚えた。

「悪りぃ、ちょっと一本だけ吸ってきていい？」

このままこの感情をぶつけるより良いだろうと思って発した言葉に、恵太は微動だにせず力無く腕を下ろした。敬はそれを了承だと捉えポケットの中身を確認して席を立つ。

「お前何やってんだよ。」

「・・・ああ？」

「・・・だせえよ。」

「何だと？」

「だせえつったんだよ！今のお前は結果も出してねえのに意気がってるガキと一緒だ！」

「てめえもういっぺん言ってみろ。」

敬は恵太の胸倉を掴み上げる。

「ああ何度でも言ってやるよ！高校卒業してからのてめえは、進学もせず就職もせず音楽に生きるとかほざいてよ！それで今のお前はどうなった？あれこれ理由を引っ張り出して煙草だ酒だギャンブルだ！おれが・・おれがどんな気持ちで、」

「うるせえ！お前におれの気持ちがわかってたまるか！お前はいいよな才能があってよ！仮歌の仕事があるからやらないかだと。どうせおれのこと見下して楽しんでんだろうが！」

「なんだと！！」

恵太は敬を押し倒し馬乗りの体勢になった。

「てめえいつからそうなったんだよ！あの頃の、おれたちの夢は！目標は・・おれたちの・・・」

恵太の目から涙がこぼれ落ちる。

「泣いてんじゃねえよ！」

敬は力の抜けた恵太を振り落とし立ち上がった。

「・・・すまん。言い過ぎたのはおれだ。」

涙をする恵太を見下ろす敬は「お前に、おれの気持ちなんてわかんねえよ。」と荷物を抱えてスタジオから出ていった。

信頼は崩れていく。あの時も、おれは心のどこかですぐに元に戻れると思ってたんだ。」

「ほんの些細なことがきっかけで、友情や利他は横で泣いている雫の涙をする音が止むまで待った。

「あいつは高校を卒業して音楽の専門学校にいったんだ。進学校でそれなりに優秀だったあいつのその選択は、おれにとっちゃ予想

外だったし、もちろん家族、特に母親は絶対に許さないだろうなって思ってた。」

既に相槌は返ってこなくなっていたが、自分の代わりに泣いてくれている雫のために、利他は敢えてその分の余白を作って話を続けた。

「けどあいつはすんなりと進路を決めた。なんでかわかるか？」

余白を空ける。

「簡単な話だ。みんな気付いてたんだよ、あいつの才能に。文化祭で歌った時もライブハウスで歌った時も、記憶に残るのはあいつの曲でおれの歌声じゃない。批評も賛否もあいつだけ。おれの存在なんてSNS上じゃないものとされてた。大人になれなかったおれはあいつの評価を素直に喜べなかった。いつも悔しくて悔しくてさ。でもあの頃はこのまま負けてたまるかって必死に練習して、そんなおれを見てあいつはいつもこう言ってくれてたんだ『やっぱりお前は凄い』って。」

頭の中に恵太の笑顔が蘇り、不意に零れそう

になる涙を上を向いて蒸発させる。

「あいつと同じことをして比べられるのが嫌で、おれは学校にも行かずバイトしながらずっと練習を続けてた。オーディションも受けまくってボイトレも通い詰めて、その中で何度か良い所まで行けて喜んでると、あいつから連絡が来るんだ。『誰々のライブのサポートミュージシャンとしてツアーに同行することになった！』ってな具合に。その頃にはもうとっくに二十歳は超えてて、おれは素人のフリーターで、あいつは音楽で飯食ってたっけな。」

抗いようのない現実に心の底から情けなくなり利他の口角は緩む。

「それでもあいつはおれとの活動を続けてくれたんだよ。ライブをするとあいつの客で完売。おれの呼んだお客さんも終演後にはあいつのファンになって帰っていった。信じられるか？ワンマンライブで合計八曲。そのうちの半分はあいつのインストなんだぜ？ステ

ージの幕の後ろでおれは椅子に座って終わるのを待った。終演後もあいつの隣で、あいつが挨拶を終えるのを待つおれの気持ちが、どうしてあいつにわかる？」

「悪い敬待った？」

自らのライブ終わりにも関わらず、敬は楽屋の隅で丸まっていた。

「いや大丈夫。ちょっと疲れた。」

「そうか・・・でも良かったよな今日のライブ。ステージ上から客席見てたけど、敬の歌声で何人か・・・・あっ、ちょっ、ごめん。」

恵太はポケットを探りながら楽屋のドアを開けて通路へ出る。

「もしもし。ああ、真弓？どうした？」

ドアが閉じ切らないうちに漏れ聞こえてきた内容に、（なるほどな。）と利他は耳を澄ました自分を呪った。

忘れたいと願えば願うほど鮮明に思い起こ

してしまう記憶が憎かった。どこからやり直せば良かったのか。どこで道を間違えてしまったのか。あの時どうすれば良かったのか。幾度となく自問自答してきたが答えは出ず、（このままこの先を話してもいいのか？）という問いにも、明確な解答は得られない。

「あいつはその二日後に死んだ。交通事故で」止める事は出来なかった。

「あいつの親御さんから夜中に連絡が来て病院に駆けつけた時にはもう・・・」記憶に深く刻み込まれた恵太の顔が浮かぶ。

「事故だったみたいで。雨降ってて、あいつの方から道に飛び出して来たんだって轢いた人が証言してたんだって。じさ・・・」言いかけてやめる。今自分がいるこの空間で、その言葉がどれほどの意味を持っているのかを不意に察した。

「信じられなくて、通夜も葬儀も記憶にないそんなことする素振りもなかったからあっちの家もバタバタしてて。全てが落ち着

いてから親御さんに家に呼ばれて、わたしたちが踏み荒らす前にあの子の部屋を見てあげてくれって言われて・・・。」

一番忘れたいと思っていた記憶がゆっくりと再生されていく。

部屋に足を踏み入れ扉を閉めると、「キーン」と音が鳴る静寂が空間を支配していた。こんな経験などあるはずもなく、何をすればいいのかという疑問に答えられずその場に立ち尽くし、視界に入ってくる情報をただ脳内に垂れ流していく。隅に置かれたギターホルダーに立て掛けられた三本のギターの中に、見覚えのある黒いボディーのギターを見つけぎこちなく近づき、触るでもなく見下ろす。そのまま視線を巡らすと部屋全体を視界に収めることができた。

対極の隅に壁にはまるように設置された白いデスク。その上に大きなディスプレイとスピーカー、キーボードにマイクスタンドやヘ

ッドホン。棚の中にはぎっしりとCDが詰められ、手前のよく見える位置に自分たちのものが飾られてある。壁には恵太が憧れると言っていたギタリストのポスターが貼られ、スタンド付きのキーボードも置いてある。

（自宅兼スタジオか。）

と心の中で敗北感に苛まれながら独り言ちる。

紙屑の溜まったごみ箱や飲みかけのペットボトル等に、確実に誰かがここで生きていたんだという生活感を直接心に突き付けられているような気がした。

さらに数分。少し移動したその場所に立ち尽くしていると、ふとデスクの上に広げられたノートが目に入り、「ドクン」と脈打つ心臓の鼓動に耐えゆっくりと近づき見下ろした。

『敬』『酷いことを言ってしまった』『お前に何ができる？』という文字が目に入り、上に書かれた二日前の日付を見て一目で日記だとわかった。もう一度始めから文字を追う。

『十一月七日

今日は敬との仮歌の録音の日だった。

今日はおれも少し疲れていたのかもしれない。

敬が遅刻して来たことや言動にいちいち腹が立ってしまった。

それに、敬に酷いことを言ってしまった。

おれがやっていることを、あいつはどう思っているのかな。

少なくとも敬の気持ちをおれがわかってやれてなかったことは判明した。そりゃ怒るわな。

おれが逆の立場だったとしたら、敬みたいに振る舞うことは出来ないと思う。

人はこんなに進化したのに、どうして他人のことがこんなにもわからないのだろう。

そこに男女や同性は関係ない。

けど男女には赤い糸があって、目には見えないが何かで分かり合えるように出来てるはずだ。

友情には何もないのか？

あんなこと言って合わせる顔がない。

でも諦める選択肢はない！だっておれたちの夢と目標は絶対に叶えられるから！

おれに何ができる？

反省の多い一日だった。』

読み終わると同時に敬は膝から崩れ落ち嗚咽を吐きながら泣いた。自責と後悔の念に耐え切れず、生きている自分を恥じた。

「そのまま・・・泣きながらおれは全ての真実を知ったんだ。あいつがこれまで何を考え、おれのために・・・どれだけの事をしてきてくれていたのかを。」

頬を伝う涙がまた新たな線を描いていく。いつの間にか握ってくれていた掌に、慰めるように遠慮がちに力が入る。

「それからあいつの家を後にしてまた泣いて、涙が止まると同時におれは声を失った。病院に行ったら精神的なものだって言われてさ、それから・・・」

ところに来るまでの虚無な日々を語ろうとしたところで、先ほどよりも強い力で手を握られた。

「もう・・・十分です。」

鼻声のなんとも気の抜ける赦しを請いたくなるような慰めだった。

「これ以上・・・自分を、自分を責めないであげてください。」

（それはできない）とそう言ってくれる雫に感謝しながら心の中で反論する。

「きっとその方も、利他さんが・・・そんな風になって、しまうことを望んでいないはずです。」

（えっ？）

もう片方の手の分の重みが加わったことを感じ横に頭を捻ると、雫が上半身ごとこちらを向いていた。伸びた前髪は涙で濡れ所々束になってしまっている。その間から覗く澄んだ綺麗な瞳は、真っ直ぐに何かを訴えかけていた。

「人は、人の気持ちを・・わからない、です。だから・・・だから、傷つけあうことも ありません。でもっ！わからないからこそ、知

ろうとしてくれる方が・・・いるんです。例えその方にとって、知って良いことなんかなくても・・・重荷になることがわかっていても、荷物を一緒に担ごうと・・・手を差し出して・・くれる方が。」

雫はそれだけ言うと両手を離し、また前を向いて顔を両手で覆い洟をすすりだした。

温もりの冷めていく手を眺めながら、利他は自分の中で積み重なっていた何かを手放したくなった。魅力を感じない、そして僅かだが軽くなっている気がする。

（恵太。お前もこんな気持ちだったのか？あれだけ言って会わす顔がねえ。）

女将と番才の顔を思い浮かべ、利他は「ふっ」と片側の口角を上げた。

〜続く〜